

争闘の世界

神野麻郎

学校は本来学びの場である。学業を修め、小社会として人間関係やルールを習い、人間性を育む。交友も大事な一項であろう。つまり知性を磨き、人間としての作法を身につけ、感情を豊かに育てる場である。といえば、学校は人間社会のゆりかごであり、あるいは雛型だともいえよう。

ところが日下高校くさかの現状はまったくそうなっていない。授業はいちおう時間割通りに行われているが、先生が教壇で勝手に進めているだけで、教室は大声で私語する者たち、歩いたり踊ったりしている者たちで騒然としている。教室から勝手に出て行っても咎める者はいない。おとなしく席に坐っている生徒がいると思えば、スマホのゲームで遊んでいるか居眠りしているかで、教科書を開き教壇の方を向いている者はごくわずかである。もちろん先生たちは、怖い経験を重ねているので、いままら生徒たちに注意するようなおろかなまねはしない。見ざる聞かざるのていで、終業の鐘が鳴るやいなや急いで教卓を離れ、そそくさと教室を出ていく。日下高校では恐ろしいことに、まずすべての授業、すべてのクラスでこうなのである。日下高校は昔宣教師の外国人が創設した私立学校で、いちおうキリスト教の教えに基づく教育を標榜しているのだが、礼拝とか聖書講読とかの時間ですらこのありさまは変わらない。

ふだんの掃除がいい加減なので教室をはじめ校内はどこも汚れ、荒れている。そこらにゴミを捨てる生徒はたくさんいても、捨てる生徒はいない。トイレは見るに堪えず、窓ガラスは毎日のように割られる。その汚れよう、荒れようは「日下スラム」とも内外で陰口されているのだが、学校側もふだんの校内環境浄化などもうあきらめていて、ただ入学式や卒業式、学校祭など、外部から多くの人が出入りする行事の前だけ業者を入れて大掃除や修理をすること、なんとか体裁をつくるおうとしている。

校内では生徒のグループが対立し、常にいがみあっていて喧嘩の起こらない日はない。グループはいくつかあるが、最大勢力を誇っているのは、三年生の神頭米男こうずねおのグループである。神頭米男は並み外れた体格をもち、腕力に秀で、真偽のほどはわからないが本人はいまだ一度も喧嘩に負けたことがないと豪語している。米男がまだ一年生の時は、君山英自きみやまひびじという腕力智略ともに秀でた三年生が学校を支配していた。君山英自は常に数十人の家来を従えて王様然と学内を闊歩していたと今や伝説的に語られているが、米男は一年次の終りにその王様の英自と対決して英自を追い落とし、英自に見込まれて跡目を譲られたとも言

われている。いずれにしても英自がめでたく卒業して去った後は米男の天下になったのである。

米男のまわりにはいつも取り巻きが数人いて、米男の命令一つでどうにでも動く。中でも寸田本治すんだほんじというのがいつもそばに忠犬よろしく侍って目立っている。寸田本治も体格はほどほどによいのだが、以前米男に喧嘩をしかけてこっぴどくやっつけられたという話で、それ以来態度を豹変させてなよよと米男に取り入るようになったらしい。米男の言うことには何でも従い、言われなくても付度して米男のために動くが、相手が弱いと見れば居丈高にいばり散らす。そんな本治を他の取り巻きたちは毛嫌いしているし、親分の米男もじつは内心軽蔑しているようなのだが、本治自身はそれに気づいていない、あるいは気づかないふりをしている。

米男が勢力をもっていることは、校長以下の教員による学内統治、たとえば学年暦や予算の作成執行、学内規則の改定、行事の遂行などの際に米男が口をさしはさみ、たいていその通りになることからわかる。どうも校長は、職員会議の議題の中でこれかと思う議題については、こっそり使いの教員をやってあらかじめ米男に意見を聴くか承諾を取るという手続きをふんでいるらしい。時には米男の方から校長に要求を出すこともある。学校予算にまで手を出すのは米男の頭のよさで、出入りの業者からリベートをせしめるというまみがあるのである。一般生徒を恐喝して取り上げる分とこのリベートとが、米男グループの潤沢な資金源になっている。集めた金は街で飲食や遊び、またちよつとした武器の購入に使うのである。

学校の重要な機能は、一定回数の授業を行い、定期に試験を実施し、学期ごとに生徒一人一人の成績を付け、単位を授与することだが、この過程にも米男は口を出す。それで自分や自分の自分が試験で白紙の答案を出しても、出席日数が足りなくても、単位は適当に出る。逆に米男の気に入らない生徒の成績は故意に下げられたりする。その代わり、というわけではないが、生徒が反抗したり不祥事を起こしたりすると、先生たちは米男に頼んで収めさせ、事が大きくならないようにする。それで常々米男は、「オレが日下のケーサツで、裁判官や」とうそぶいている。

しかし、日下高校には米男のグループに対抗するグループもあって、中でも有力なのは基山中太やまなかたのグループと尾身重連おみあれんのグループだ。基山中太はまだ二年生だが、勢いのある若手力士のように近ごろぐんぐん力をつけてきた。中太もまた他を寄せつけない偉丈夫だが、一年生の間は米男たちのふるまいをうかがうように、また自身の成長を待つように、おとなしくしていた。でもその間に、裏では米男の目の届きにくい自分の同学年の生徒たちを取り込んで着々と力をつけていた。米男も、ひととき体格の優れた下級生の中太は初めから目に留めてはいたが、まだまだひよっこだと軽んじ、放っておいた。けれども、あつと気づいた時にはもう無視できない下級生グループができ上がり、上級生をも取り込みはじめていた。米男

はちよつと慌て、画策して中太のグループをつぶしにかかろうとしたが、中太は智慧も回るらしく周到に立ち回った。中太の勢力が伸張してきたので、このごろは両グループの間で境界争いのような摩擦が起こりがちだ。校長も含め、教員の一部が中太を優遇するようになってきたようなのも米男の気にさわる。奴らは、オレたちが卒業した後は中太の時代になるとこすから先を読んでいるにちがいない。中太とはやがては正面からぶつかって決着をつけてやると米男は心に決めているが、慎重なところのある中太の方も、このごろちらちら挑戦的な姿勢をとるようになったところを見るとどうやらその肚はもっているようだ。

尾身亜連は三年生で、白熊のような風貌の男だ。米男とは入学時から反りが合わず、ずっと対立して二人で派手な喧嘩をやらかしたこともあるが、腕力は拮抗している。ただ、智略では米男の方がだいぶ勝って勢力を広げたのに比べて、尾身亜連のグループは広がらなかった。それもグループには粗暴な亜連を怖れてしかたなく与しているだけの奴らが多く、結束が固いとはいえない。しかし亜連自身が秀でた腕力にまかせていつ何をやらかさかわからない不気味さをまとっている上に、何の不正をしたのか、はたまた身内に気前のよい金持ちでもいるのか、鬩りに備えてかなりの武器はそろえているらしいので、米男もうかつに手出しはできず、かち合えば睨み合うが手は出さないとというような冷戦状態が長く続いていた。でも米男は、これも卒業までには何とかしてぶつつぶすつもりでいる。

以上のように日下高校では、米男グループがおおよそを仕切り、亜連グループが小規模ながらそれに対抗し、その間隙を縫うように中太グループが台頭してきたという構図のままである力の均衡ができ、小競り合いはともかく、しばらく学内は「平和」が保たれていた。だが、二学期が始まって少し経った九月半ばの火曜日のことだったが、この均衡を一拳に崩しかねない事件が起こった。発端は、かねてより米男グループが亜連グループの結束のゆるさを衝いてその切り崩しを画策していたのだが、それが奏功して亜連の有力な取り巻きの二人が米男グループに寝返ったのが発覚したことだ。二人が寝返ったのは、自分たちに与すれば一学期に付いてしまった通信簿の赤字を消してやるし、金品も恵んでやると誘われたからだそうである。ただ寝返ったばかりでなく、二人は亜連たちがひそかに学校の裏山に隠しておいた武器の大半を持ち出して夜陰にまぎれて学校の近くの大川に投げ捨ててしまったというのである。もちろんすべては米男の指示による。

これに白熊の亜連は激怒した。自ら手勢を率いて授業中の教室に乗りこみ、その二人を捕まえて裏山に拉致し、殴る蹴るの暴行を加えた。二人はなすすべもなかった。二名拉致のこととはただちに米男に仲間から注進が行ったが、その時米男は怒りだすどころか、にやつと笑って、そばにいた寸田本治らに、山で二人がやられているようすをかげからスマホで撮ってこい、と命じた。こうなることは予測の内、やられている二人はもともと昨日まで向こう側だったのだし、見捨ててもよい、しかしこれを口実に一気に亜連グループを掃討してやろうという肚だったのだ。

米男は周到に企んでいた。自らは裏山ではなく校長室に出かけて、何ごとかと思わず起立してしまった校長に、亜連たちが裏山で仲間をリンチしているとだけ伝えた。青くなつた校長は、教頭以下体育の教員ら男性教員数名を裏山に急行させた。四十分くらいして、あわれに血と涙を流している二人の生徒を教員たちが運んできて保健室のベッドに寝かせ、保健師が応急処置した。それから、二人とも骨折もしているので、車で校医の営む医院に連れていった。

米男は校長に、明日首謀者の亜連と亜連の親を呼んで事情聴取し、その後職員会議を開いて暴行を理由に亜連を退学処分にしろ、と要求した。証拠はこれだと、本治らから届いた裏山での暴行場面の動画をその場で校長のスマホに転送した。もしそうしなければ警察にこの動画を送るから、と冷たい調子で脅しました。今でも警察に通報すれば亜連はたちまち拘束され、施設送りになるだろうことは予測できたが、警察が入って公の事件になるといろいろ学校の状況も調べられるから、それは不都合だと米男は計算していたのである。事がらの急な展開に還暦間近で禿頭の校長は目を白黒させていたが、それでもさすがに大人の知恵を働かせ、これはそう単純にはいくまい、あれこれ考えるべきことなすきことがあると思つた。しかし目の前の米男を深く怖れてもいたので、いちおう了承しておいて、後でなんとか穏便にすませる算段をひねりだそうと思つた。

だが事態は、米男の迷惑通りに進んだ。ただし、途中までは。その夕方、ケガをさせられた二人の生徒の親たちが学校に怒鳴りこんできたが、これも予測の内だった。校長は教頭や生徒指導の教員や担任といっしょに應對して、監督管理の不行き届きで責任はすべてこちらにあると平謝りに謝り、ケガの治療費はもちろん全額学校側が持つと申し出た上で、他方ではその生徒たちの日ごろの悪行も並べたて、表沙汰にしないほうがお互いのためだ、ということを巧妙な言い回しで説得した。もちろんこの暴力傷害事件をどう収めるか、あらかじめ学園の最高責任者の理事長とも相談した上でのことだ。

翌朝、亜連と亜連の母親が校長室に呼ばれ、事情を聴かれた。証拠の動画がものを言つて、亜連は言い逃れができなかった。校長は、亜連と母親に、本来は警察沙汰にしなければならぬほどの傷害事件だが、そうはしないことを被害者の親にも何とか納得してもらつた、けれども亜連の今までの行状と今回の傷害事件とで学校としては亜連に厳しい処分をもって臨まざるを得ないと、退学処分にする可能性を示唆した。その午後に、緊急の職員会議が開かれ、反対意見は出ず、あつけなく亜連の退学処分と暴行に加わつた子分数人の停学処分が決定し、事務室から電話でそれぞれの家庭に伝えられた。

収まらなかつたのは亜連だ。事態のあまりにスムーズな展開に目を白黒していたが、後であれこれ思つてみるに、動画を撮つたのは誰だ、なぜそれをすみやかに校長が入手していたのだ、という疑問を起こして回りにあれこれ不満不審をぶちまけているうちに、すべては米男だ、あいつがオレをハメやがつたのだ、とようやく読めてきた。あらためて怒りが沸騰す

る中で、これはもう許せん、どうせ退学になるんや、殴りこんで米男をいてしまおう、と決意したのは早かった。しかし、米男の回りは常にたくさんの取り巻きがしつかりガードしている、姑息な奴だからこっちの動きもスパイしているだろう、こっちは味方も寥寥、殴りこむのはこれもあいつの思うつぼか、こっちがやられてしまうかもしれん、という弱気も起こり、怒りと逡巡の間で悶々とした。

そこへ中太から電話がかかってきた。「先輩、どうですか？」と同情して見舞いを言うような馴れ馴れしい調子だ。亜連と中太はふだん良好な関係というのではなかったが、どちらも最大勢力の米男に敵対しているという点では共通しているので、まったく没交渉でもなかった。亜連は自分の憤りを吐き出したい勢いで、今回の米男の悪だくみについて、少しどころなりながらだが一氣にまくしたてた。「そんなことだろうと思ってました」、聞き終わるととくに驚いたようすもなく中太は受けた。「それで先輩、どう落とし前つけるんですか?」。つられるように亜連は、「決まっとるやろ、あいつをぶちのめしたる!」とスマホに怒鳴ったが、威勢よく怒鳴りながら、そうや、中太が助成してくれたら、と気づいて、中太の調子で自分に好意的なようなのでつい、「おまえ、ちよつとスケてくれへんか?」と口走ってしまった。口走りながら、何かむずがゆいものが背筋を走りもした。「ええですよ、先輩」、中太は即座にこともなげに答えた。「ほんなら、明日にでも会うて、作戦練りまひよか」。

ことの進展は早く、三日後の金曜日の夕方、場所は学校の裏山である。亜連が中太を助太刀として米男に挑戦状をたたきつけ、日時も場所も指定したのだ。米男にとってはそうした亜連の動きも想定内だったので、すぐに挑戦を受けた。

夕方五時ごろになると、運動部がまばらに活動しているグラウンドを横切って、学生服の着こなしの乱れた連中が西から東から続々と裏山に登っていった。裏山の一部は学校の敷地の内で、木々の間に生徒の野外活動用にあスレチックコースが作られているが、近年はあまり使われていないので施設はもう一様に古び、荒れている。一面に多目的に使う野外劇場のような施設があつて、石やコンクリートで作られたステージや客席やモニメントがあるが、学校予算がそこまでは回らないのか長年放置されて灌木や草の生えるにまかせている。

その窪地のような所に、殺気立った三つのグループが対峙した。皆、それぞれが角材や鉄棒を持っている。ヌンチャクや四尺棒も見える。多勢なのは米男グループで、四十人ほども集まった。亜連グループは今度の事件でケガ人も離散者も出てわずかに五人のみ。そのそばに中太グループが二十人ほど。敷の上では米男側がまさったが、亜連や中太側はドスや日本刀を用意しているというわさが流れ、対抗して米男側もひそかに数本は用意した。妙だったのはその三グループのほかに、見慣れない、齢も二十代三十代のゴロツキ風の男たちが十人ほども連れ立って少し遅れて山道をのそのそやって来たことだ。

「あんたら誰やねん。こんな山の中に何用があるねん」と米男をバックに寸田本治が誰何したところ、中のサングラスをかけたアニキ格らしいのが、

「おう、あんちゃん。元気ええな。ワシらおもしろい喧嘩があると聞いたんで、見物に來ただけや。気にせんとあんじようやつてや」と平然と答えた。アニキ格があごを振ると、彼らは見物よろしく、客席になつてゐるコンクリートの段に坐りこんだ。ヤクザのスカウトでもあるまいに、と生徒の何人かが思い、気味が悪かつたものの、放つておくしかなかつた。

よそ者たちの闖入でちよつと氣勢が削がれた感じが漂つたが、亜連が米男に向かつて、

「おまえら、よう來た。米男、いろいろ卑怯なことやつてくれたなあ。許せへんで。最後の決着つけようや！」と怒鳴ると、米男も、

「おう、亜連、ようゆうた。望むところや。今度こそいてもたうで！」と怒鳴り返し、味方に向かつて、

「おまえら、ええか！ やるで！」と叫ぶと、双方が手に手に持ったエモノを振り上げ、今にも互いに走り寄り、ぶつかつて血を見る乱闘が始まると思われたその時、

「ちよつと待てえ！」と、大相撲の行司のような胴間声で両手をふり挙げて双方を制止したのが中太だつた。声はすり鉢状の空間によく響き、もう数歩前に走り出していた者たちも立ち止まり、皆がいつせいに中太を注視した。中太は太いがよく響く声を張り上げた。

「おまえら、このまま大勢で殴りおうて、どうなると思とんや？ そんな角材や鉄棒で相手の頭思いきりしばいてみい、死ぬで。ドスのんどる奴もおるんやろ。ドスで深うに胸や腹刺したら死ぬで。やられた奴はあの世行きで、やつた奴は刑務所行きや。ほんで、ここにおる奴らは全員放校処分や。警察來てマスコミも來るで。ええんか？ ほんなんで。一人一人ドタマよう使うて考えてみい。ええんか？ ほんなんで」

中太は二年生だが、そこにたくさんいた三年生の生徒たちよりも大人らしい態度であたりを睥睨した。威圧感あるそのようすに、一同は静まつて声も出なかつた。窪地にも西日がさしこみ、ものみなあざやかな中を白い風が吹き抜け、ススキが揺れた。

「中太、ほなどうしたらええんや？」という声が、米男と亜連からほぼ同時に出た。中太は交互に二人を睨みつけた。

「大将戦で決着をつけるんですよ！」

中太が説明するには、こんな事態の場合には大将どうしが素手で闘つて決着をつけるのがベストだ、大将は自分も含めてここに三人いる、三人のうちまず米男と亜連が闘う、それで米男が勝つた場合には次に米男と中太が闘う、どちらかが倒れて動けなくなるまでエンドレスでやつて、それで後腐れないよう勝ち負けを決めようというのだ。

「米さんは二回闘うことになるやんか、それでは不公平じゃん！」と米男の腰巾着の寸田本治が口走り、対して亜連の取り巻きの一人が、

「何を！ 亜連さんが勝つに決まつとるわ！」と返した一幕が続いたが、米男自身はそのや

り方でいいと言った。負けない自信があった。もちろん亜連の方も米男との一騎打ちは望むところだった。すんでのところで大勢の血みどろの闘いになるところが、中太の持つていき方一つでまるで武術の試合観戦のように変わって、手に手にエモノを持って勢い込んでいた双方の生徒たちは拍子抜けするやら安堵するやらしたが、全体の殺気はだいぶ引いていた。この成り行きをゴロツキめいた得体の知れない男たちは何も言わず、坐ったままでニヤニヤしたりタバコをふかしたり何かを飲んだりして横目で眺めていた。

敷き詰められた煉瓦様の石がでこぼこし、間から雑草が立ち上がっている平面の一方に米男が学ランを脱いで太い拳を誇示するように左半身に構えた。対する亜連も同じようなポーズをとって立ち、二人は少しの間ならみ合った。双方の取り巻きの間から唸りのような声が盛り上がった。その中を「おう！」、「来いや！」と叫び声が貫き、二つの身体はぶつかり、もつれあつた。ちょうど夕日が西山に沈むところだった。

「裏山決戦」は校内でその後も長く語り継がれ、「日下高校裏面史」の一部を飾ることになつた。そこには「まず神頭米男と尾身亜連が十八分間闘い、神頭米男の辛勝、十五分間休憩した後、次に神頭米男と基山中太が九分間闘い、基山中太の圧勝」と記された。戦闘時間の記載からもわかるとおり、米男は亜連との闘いで体力をほぼ使い果たし、もう中太と闘う余力を残していなかったのだ。この敗北は米男の計画にはなかつた。一方中太は筋骨き通りに事を進め、成し遂げた。後日校内で、中太は頭のいい奴だという評判が立つ一方、姑息な奴だという陰口もささやかれた。

中太についてのうわさでは、「裏山決戦」、あれは中太と校長が仕組んだ猿芝居だった、というのもある。校長はグループ同士の争いが警察沙汰になるのを何より怖れた。そこで中太と謀って、あのように最小限の流血ですむようにもっていった。中太の方は米男と亜連を闘わせて両グループの勢力を削ぎ、校長にも貸しを作って漁夫の利を得た、というのだ。ではあの得体の知れないゴロツキどもは、というと、連中は遠くの街から校長側に金で雇われてきた札付きたちで、もし中太の提案が通らず、双方のグループ入り乱れての闘いに至った場合にはあの者たちに中太側に加勢させ、米男のグループを一気に叩きつぶしてしまう計画だったのだという。あれも校長と中太が結託して考えた作戦だった、というのだ。ただしこれらのうわさの真偽のほどはさだかではない。

ともかく「裏山決戦」から二カ月ほどが経ち、激変した学内の勢力地図もどうやら落ち着きを見せてきた。中太グループが肥大化し、以前の米男グループに取って代わって全体を仕切るようになった。米男グループはとうとかなり縮小して、米男自身も時に荒れはするがだいぶおとなしくなつた。あの米男の腰巾着だった寸田本治は、このごろもう中太にへつらい、媚びを売っている。亜連は中太の強引な取り成しで放校処分は免れたものの、そのグループは霧消し、亜連は中太の取り巻きの一人に成り下がった。顧問格ではあるが、米男との

喧嘩に負けたこともあって仲間からは軽んじられている。校長は弱みを握られているので中太に頭が上がらず、ほとんど言われるままだが、中太が米男ほど悪どくなさそうな点で一つ改善したとは思っている。

しかし一般生徒に「上納金」は要求するし、グループの学内での恐喝、つるし上げ、殴り合いは日常茶飯で、中太のやり方もなかなか乱暴だ。グループは中太をトップにいただき、メンバーは組織化されロボットのように従順で、結束は一見異常に堅固だ。だが裏では、グループの掟に反したという理由でしばしば陰湿なリンチも行われているらしい。被害を受ける一方の一般生徒たちは内心中太の天下を苦々しく思っているが、米男時代と同様スパイ網が張り巡らされているので、うかつにもは言えない。教卓で教員が小声で勝手にしゃべり、生徒は授業そつちのけで遊んでいるという授業風景は以前と少しも変わりが無い。

そんな、一言で言えば恐怖による支配が蔓延している学内で、その間隙を縫ってそろそろ第四の勢力が一年生の猛者たちの間から台頭してきているといううわさもないではない。また、このごろ中太は、どういうわけか、学園理事長の私邸によく招かれているそうである。